

# たまのよこやま

他館との連携事業報告

平成29年度企画展示好評開催中

# 他館との連携事業の報告 2017春・夏

2017年度の春・夏に実施した事業の中から、自然観察会①をはじめ、町田市、調布市、文京区との連携事業をご紹介します。

新年度が始まって最初の行事は自然観察会です。この行事では、植物の専門家を講師に招き、遺跡庭園「縄文の村」において季節の植物を観察します。毎年春と秋の2回開催していますが、毎回必ず申込み方もいて隠れた人気行事と言えます。講師は、当センターに近接するパルテノン多摩で学芸員を務める仙仁<sup>せんにけい</sup>氏です。春の観察会では、季節柄、色とりどりの花を観察することができます。この観察会でも、ヤマブキやシャガにウグイスカズラ、ヤマモミジ、ニリンソウやカタクリ、アオキ、クロモジやヒサカキといった花が見頃を迎えた植物をはじめ、新芽が育ち始めたミズキやヤツデ、シロダモ、春の山菜であるゼンマイやワラビなど、約30種類の植物を観察しました。

仙仁氏によれば、観察会ごとに観察するテーマやポイントを決め、植物の解説をしているそうです。植物の専門用語には難しい言葉も多くありますが、仙仁氏の解説はとても分かりやすいと毎回好評です。解説を聞きながら植物を観察していると、あっという間に時間が経ち、気が付けば観察会の終了時刻が近付いていました。観察会の参加者には熱心な方も多く、観察会終了後には、自分で先ほど観察した植物の復習をしている参加者の姿もみ



ヤマモミジの花を観察する参加者 られました。

天候不順が続いていますが、次の秋の観察会ではどんな植物が観察できるのでしょうか。

5月20日には、町田市青少年施設ひなた村との共催事業として「縄文の布作り」が実施されました。当センターとひなた村とが協同するのはこれが初の試みであり、「縄文時代」をテーマとしてこれを含め2回の行事を行う予定になっています。今回は「布

作り」ということで、まずは縄文時代の服装についてのレクチャーから始まりました。布を作るには材料となる糸が必要ですが、縄文時代にはその糸を作る素材としてアサやカラムシ、イラクサなど身近にある植物が用いられたと考えられています。それらの植物の繊維を素材として編まれたのが「編布<sup>あんぎん</sup>」です。編布は、緯糸<sup>よこいと</sup>を経糸<sup>たていと</sup>でからめながら編んでいきます。現在、私たちが使っている布の大部分は織布<sup>しょくふ</sup>であり、織布と編布とはその製作技法がまったく異なっています。縄文土器に残っている編み物などの痕跡から、縄文時代にはこの編布の技術がすでに コモツチを前から後ろに、後ろから前に存在したと考えられています。



当日は、経糸にたこ糸、緯糸に麻ひもを用いて編布に挑戦しました。編む準備として、コモツチに経糸を通し巻き付けるのですが、参加した小中学生にとってこれが思いのほか難しかったようです。この準備と編み始めの部分さえクリアすれば、あとは同じ作業の繰り返しです。最初はぎこちなかった手つきでしたが、慣れた頃には無事、コースター程度の大きさの布を完成させることができました。

空梅雨が続いた7月9日、調布市との共催事業「<sup>からむし</sup>芋糸づくり体験教室」が開催されました。この行事は昨年度に続き2回目を数え、今年からは小学生も 親子で芋引き！



参加できるようにと対象者の幅を広げました。当日は大人に混じって、保護者と参加する小学生の姿もありました。糸作りは、糸の材料となる繊維を取り出すところから始まります。この教室で使うカラムシはイラクサ科の多年草で、現在では用水路の脇などで見かけます。



上：乾燥中のカラムシの繊維

下：カラムシの糸でストラップ製作中

まず、葉を落としたカラムシの茎を折り、皮を剥いていきます。剥いた皮から不要な外皮をこそぎ落とし、繊維を含む韌皮だけを残します。このように繊維を取り出す作業は「苧引き」などと呼ばれ、力加減がなかなか難しい作業です。

何本か苧引きするうちに皆さんの手つきが慣れてきたようで、着々と繊維が取り出せるようになっていました。取り出した繊維は干して乾燥させ、ここからが糸作りの本番です。糸にするには繊維に撚りをかけていくのですが、この作業もまた手こずる作業のひとつです。一人で糸を撚るのは慣れていないとなかなか難しいのですが、二人でやると案外簡単に撚ることができます。保護者と参加していた小学生は、お母さんと息を合わせて撚ることで、2m以上の長い糸を作ることができました。

必要な長さの糸ができれば、最後にその糸でストラップを作ります。ストラップはねじり結びで作るのですが、参加者の中にはねじり結びで何か作った経験があるという方が複数いらして、容易くストラップを作り上げていました。ねじり結びの端にはムクロジの実で作った特製ビーズを付けて完成です。終了後には「余った繊維で家でも糸を作ってみます！」という参加者もいて、難しいながらもカラムシの糸作り体験に満足していただけたようでした。

文京区との共催事業「子ども考古学教室」は、今

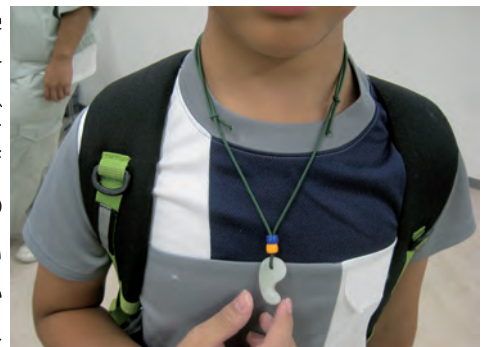
年も夏休みに入って間もない、7月25日に開催されました。例年は午後1回のみで開催



でしたが、知っている場所に遺跡はあるかな？ 毎年定員を大幅に上回る申込みがあるため、今年は午前と午後に1回ずつ行うことにしたそうです。

当日はまず「埋蔵文化財」や「考古学」についての話や、区内の遺跡について写真などを見ながら文京区職員からの説明を聞きます。子供たちに配られた資料には、区内の遺跡一覧表と遺跡地図があり、これを見ると区内の遺跡の範囲が分かるようになっています。子供たちの中には、自分の家や知っている場所が遺跡かどうか確認していた子もいたのではないのでしょうか。

次に、実際の出土品を使い縄文土器と弥生土器の比較や、黒曜石で野菜を切る体験を交えながら、遺跡からの出土品について学んでいきます。このように遺跡から出土した縄文土器や弥生土器に直接触れる機会はあまりないので、子供たちにとって印象深い経験になったと思います。教室の最後は、お待ちかねの勾玉作り体験です。と言っても、今日は「子ども考古学教室」ですので、ただ作るだけでなく、その歴史についてもしっかりと説明を聞きます。



自分だけの勾玉が完成！

最初は長方形だった石材を一生懸命削り、勾玉の形に近づけていきます。角があるものを丸くする作業は、簡単のように見えても思うようにいかない部分があります。苦労しながらも、勾玉の形を整えたら最後に磨いて、紐とビーズを通せば、自分だけの勾玉の出来上がりです。勾玉作りも含め、内容が盛りだくさんの子ども考古学教室、夏休みの自由研究に一役買ったことでしょう。 (小西絵美)

桜木遺跡（世田谷区遺跡No. 86）は東京都世田谷区桜一丁目にあり、武蔵野台地の南東部、目黒川の支流である烏山川とその支流の細谷戸川に挟まれた、標高40m前後の舌状台地上に位置しています。烏山川とは約5mの比高差を有しています。

本遺跡では、これまでに縄文時代中期（約5,500～4,500年前）の竪穴住居跡が283軒（建て替えも含めると405軒）発見され、目黒川水系における縄文時代中期最大規模の拠点集落であることが明らかになっています。

縄文時代中期の大規模集落の多くは、墓域と考えられる空間を囲むように、竪穴住居や掘立柱建物が並び環状集落です。長期にわたり継続的に集落を営んだ結果、環状の配置を呈したと考えられます。縄文時代中期の環状集落は、都内でもたくさん見つかっていますが、桜木遺跡では、ほぼ同時期に営まれた竪穴住居跡のグループの存在が複数確認されています。

発掘調査は平成17年から断続的に行われてきました。今回はその14回目の発掘調査になります。今回の調査地点は、竪穴住居跡が密集しているところから南東に少し離れた部分に当たります。

調査の結果、縄文時代中期前半の竪穴住居跡3軒が発見され、数多くの石器、土製品が出土しました。なかでも、土器の口縁部に土偶に似た顔をつけた人面装飾付土器は、マツリにかかわる道具だと考えられています。本遺跡では2例目の発見となります。また、土器片を再利用して漁網用の錘に加工した土器片錘も発見されました。石器には、石鏃や土掘具と考えられている打製石斧などが出土しています。

今回調査した範囲は、検出した遺構や遺物の年代から、縄文時代中期前半に主に利用されていたことがわかりました。現在は発掘調査を終了し、整理作業を行っています。今後は調査成果をまとめ、桜木遺跡でどのような集落が営まれていたか、明らかにしていきたいと思います。（石橋峰幸・佐賀桃子）



写真1 縄文時代中期の竪穴住居跡



写真3 人面装飾付土器



写真2 縄文時代中期の土器



図1 縄文時代中期の集落変遷図

# かゆい所に手が届く

## 遺物の基本的な見方 縄文土器編⑤

縄文土器には、文様だけでなく形にもさまざまなバリエーションがあります。「器形」とは、文字通り土器の「かたち」をあらわす考古学用語ですが、この器形の違いによって、縄文土器はいくつかの「形式 (form)」に分けることができます。そこで今回は、縄文土器の形式について考えてみましょう。

縄文土器の形式でもっとも一般的なのが、「深鉢形」です。深鉢形土器は、器の高さが口縁の直径の値よりも大きく、全体的に縦長のプロポーションとなることが特徴です。縄文時代の遺跡から出土する土器のほとんどは深鉢形で、ドングリなどの灰汁抜きや日常の調理をするための鍋として、縄文人にとって欠かせない器でした。土器の表面にススやコゲが付く例も多く、深鉢形土器と煮炊きの火との深いかわりを読み取ることができます。

深鉢形土器の次に多く出土するのが「浅鉢形」です。浅鉢形土器は、器の高さが口縁の直径の値よりも小さく、横長のプロポーションを特徴とします。縄文時代の前期 (6,500 年前頃) に出現した浅鉢形土器は、その後縄文土器の形式の一つとして広く普及します。火を受けた痕跡がみられないことから、盛り付け用の器として使われたものと考えられています。ただし時代や地域によっては、浅鉢形土器がお墓に置かれた例もあることから、さまざまな場

使われた土器形式といえます。ちなみに、深鉢形に比べて文様が少ないように見える浅鉢形土器ですが、出土品の中には赤色や黒色の顔料でペイントされたものもあることから、本来はカラフルでおしゃれな器だったのかもしれませんが。

縄文土器の形式は、壺形や皿形などほかにも数種類が確認できますが、多摩ニュータウン遺跡群では、「注口土器」、「有孔罎付土器」、「釣手土器」という三つの形式が特に注目されます。注口土器は、注ぎ口が付いた土器のことで、なんらかの液体を注ぐための器と考えられます。口縁に孔をめぐらせ、その下に刀の「罎」のような粘土紐を貼り付けた有孔罎付土器には、お酒造りや太鼓などの用途が想定されています。土器に橋を架けたような把手が付く釣手土器は、灯火を入れてランプのように使ったという説が有力です。

縄文土器は、時代が進むにつれてたくさんの形式が生み出されていきます。形式の分類や変化にかかわる研究は進んでいますが、そもそも縄文人が多様な形の土器を必要とした理由は何だったのでしょうか？そしてまた、現代のキッチンではほとんど見かけない「深鉢形」の器を多用した縄文人の生活とは？土器の「かたち」のナゾもまた、縄文土器の「通な」見方の一つといえるでしょう。 (大網信良)

### 深鉢形土器

もっともメジャーな土器形式！



No.72 遺跡



No.446 遺跡

### 浅鉢形土器

当時はもっと派手だった？



No.245・248 遺跡



No.300 遺跡

### 注口土器

ココが注ぎ口



No.194 遺跡

### 有孔罎付土器

酒造説？太鼓説？  
それとも別の使い方？



No.471 遺跡

### 釣手土器

縄文ランプ？



No.72 遺跡



No.245 遺跡

多摩ニュータウン遺跡群の縄文土器形式 (縮尺任意)

# いま あの遺跡は現在！？ Vol.11

## — 新宿イーストサイド 新宿区新宿六丁目遺跡 —

東京都埋蔵文化財センターでは多摩ニュータウン遺跡群をはじめ、都内各地の遺跡の発掘調査を行ってきました。このコーナーでは調査時と現在の写真を比べながら、調査後の遺跡がどのように変わったのかをご紹介します。もしかしたら皆さんが日常利用している施設や道路の下にも遺跡が眠っていたのかも知れません。

新宿駅から徒歩10分ほど、<sup>はんか</sup> 繁華な明治通りの東側に新宿イーストサイドがあります。東新宿駅直結の商業施設のほか、大手企業の入居する高層複合ビルやマンションを含むこの街区は、日本テレビゴルフガーデン跡地の再開発によって誕生しました。

再開発に先立って行われた発掘調査では、古くは縄文時代早期前半（約9,000年前）から中世（室町時代）、江戸時代に至る遺構・遺物が発見されています。

江戸時代の古地図を見ると、この周辺は天正十九年（1591）に鉄砲玉薬同心の耕作地として使用されており、その後東側に<sup>いすもひろせはん</sup> 出雲広瀬藩の下屋敷が造営され、幕末には<sup>おうみやまかみはん</sup> 近江山上藩稲垣家へと<sup>やしきが</sup> 屋敷替えさ

れています。

遺跡の南から東側にかけては神田川に合流するカニ川が流れていましたが、現在その流路は<sup>あんきよか</sup> 暗渠化され、新宿文化センター通りとなっています。室町時代頃には河川沿いに集落が営まれていました。遺跡の東側にある<sup>だいしょういん</sup> 大聖院には今も当時の<sup>いたびのこ</sup> 板碑が遺されています。

調査区の南側からは縄文時代早期前半の遺物が約21,000点も見つかったほか、調理に使用されていたと思われる<sup>しょうどあと</sup> 集石や焼土跡が数多く検出されました。

気候の良い季節。皆さんも古人の生活の跡をたどってみたいはどうか。（武内 啓）



写真1 現在の新宿イーストサイド（北西の新宿7丁目交差点から）と江戸時代の絵図に合わせた調査範囲。北側に<sup>いすもひろせはん</sup> 出雲広瀬藩の武家屋敷が立地し、南から東にカニ川（新宿文化センター前の道付近）が流れています。中世の遺構群は南東のカニ川に沿って広がっていました。縄文時代の遺構は遺跡南端部で見つかっています（右図 東京都教育委員会提供）。



写真2 新宿六丁目遺跡の出土品（左：縄文時代早期前半の撚糸土器 中：中世の漆器碗 右：江戸時代の石製<sup>かんざしだま</sup> 簪玉）。江戸時代の出土品の一部は、現在開催中の東京都立埋蔵文化財調査センター企画展示「東京発掘 江戸っ子のくらしと文化」で実物が展示されています（東京都教育委員会提供）。

私が東京都埋蔵文化財センターに就職したのは、1984年（昭和59）です。今から33年前でした。多摩丘陵の遺跡には一度も足を踏み入れたことがない私にとって、すべてが未知の世界でありました。学生時代、主に古墳時代の墓を勉強していたため、

恥ずかしながら、当時、多摩丘陵の縄文時代や陥し穴などの知識は皆無に等しかったのでした。

ところが、入所から6年目、思いもよらぬ情報が飛び込んできました。それは、多摩ニュータウン遺跡群の相原・小山地区の調査現場近辺から偶然、横穴墓が発見されたという内容でした。私は上司に志願して現地に赴き、東京教育委員会の雪田学芸員から発見の様子を伺いました。それに拠れば、造成業者が工事用道路を開削中に南側の斜面が陥没して、大きな穴が開いたとのこと。内部に人骨が見



1号墓前面

えたため、警察に通報したが、埋蔵文化財であることが判明し都に連絡があったそうです。ちょうど近隣で別の遺跡の調査が実施されていたので、しばらく、その事務所の一角を借りて、私が調査を行うことになりました。

早速、重機などにより陥没地点周辺の表土を掘削し、横穴墓（1号墓）に通じる墓道を検出し、さらに西側に掘ったところ、別の横穴墓の墓道が併行するように発見できました。やっぱり、もう一基あったか！通常、横穴墓は複数が集まって墓域を形成することから、まさに、予想通りの展開。やっと、これまでに培った経験が生かせる機会がやって来たと、心躍るものがありました。

1号墓はすでに天井の一部は崩落し、閉塞石も外された状況でしたが、内部には礫床が良く残っており、成人骨1体も遺存していました。奥壁はアーチ

# 1/1964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

## # 34 多摩ニュータウン No. 951・952 遺跡

形で高さ1.0mほどの低い造りでした。墓の前面には細長く南側斜面に長さ4mほどの墓道が伸びていました。

さらに、1号墓から7mほど離れて検出された2号墓は、全長4.5mの墓道を有し、墓室は低平な天井で、奥行きは2mと

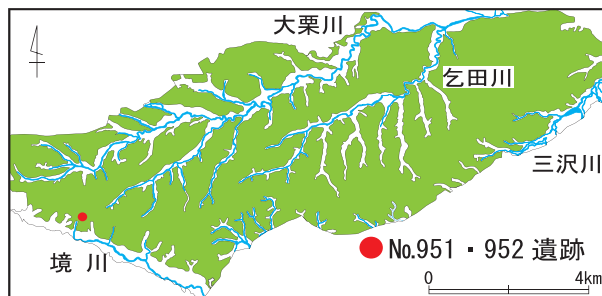
小規模なもので、床面に木炭が敷き詰められた稀有な構造でした。墓道部の堆積土からは、土師器や須恵器片も検出され、その時期から、この墓が8世紀初め頃まで存続したことがわかりました。



1号墓の人骨

大型の横穴墓が発見されたり、No. 192 遺跡のように、10基もの横穴墓がまとまって掘削される例など、周辺からも古墳時代終末期の横穴墓が相次いで発見されました。これまで見つけれなかった墓が、この遺跡の発見を契機に、次々に検出されることになったのです。これにより、古代多摩丘陵の開発に従事した名も無き集団の墳墓が明らかになりました。

この調査以後、No. 313 遺跡のように墓の前面に石積施設を有する



多摩ニュータウンNo. 951 遺跡位置図

いま思い返せば、この遺跡は私にとって、再度自分に自信を与えてくれた現場であり、遺跡群調査の観点からは、新たな歴史の展開が予想される画期的な意味を有する遺跡でもありました。

（松崎 元樹）

『東京発掘 江戸っ子のくらしと文化』

江戸の手仕事・技術

都心部の再開発に伴う発掘調査は、地下に眠っていた江戸の姿を浮き彫りにしました。東京の基盤を形作った土木・建築の技術や、江戸文化の水準の高さには驚かされるばかりです。

江戸に暮らしていた人たち、一般的には「江戸っ子」と呼ばれますが、彼らが日々の生活の中で使っていた様々な「道具」について、あまり多くは語られていません。何故ならば、それらの多くが今もなお社会の中で普通にみられるからだだと思います。

江戸に運ばれた陶磁器類を、当時の代表的な産地名で総称したことで、現代でも「瀬戸物」と呼ばれていることから納得できるかと思えます。

こうした当時の道具の数々を見ると、そのひとつひとつが手仕事で作られ、なかには相当高度な技術が駆使されているものがあることがわかります。



様々な装身具(上段：櫛と櫛払い、下段：簪・笄など)

例えば、企画展示の「江戸のたしなみ」に陳列した、デザインを凝らした化粧道具や髪飾りの数々。豊か

になった生活を背景に、高貴な奥方も町娘も、皆それぞれのおしゃれを楽しんでいたようです。

また、武士がこだわったアイテムは、目貫めぬきや小柄こづかなどの刀装具とうそうぐに代表されるでしょう。

素材やデザインにこだわり、人が持っていないものを求めるようになる。職人に対して様々な注文を



上段：目貫(牡丹・金製)、下段：小柄(魚子地に鈴虫)

するようになり、オーダーメイドが当たり前になる。これは決して武士階級だけのことでありません。町人もまた印籠いんろうや根付ねつけ、煙管きせるなどでその意匠いしようや素材にこだわっていました。こうして「粹いき」や「見栄みえ」など、江戸特有の文化が育まれました。

このような江戸の人々の様々なニーズは、「ものづくり」に携わる職人たちの技術を飛躍的に向上させました。

写真のように、透かし彫りにした象牙うるしや漆くしを使った櫛べっこう、銀や鼈甲かんざしこうがい、ガラスなどを素材に、様々なデザインで作られた簪かんざしこうがいや笄かんざしこうがいと「いち止め」と呼ばれるヘアピン状の製品、目貫めぬきにみられるような滑らかで細かな表現、小柄こづかでは鈴虫の触角の先端部なめのみに銀象嵌ぎんぞうがんを施すなど、精緻ほどこ・細密せいちを極めていいます。しかし、その製作技術は明治維新後、彫金さいみつや金工きわ、漆工芸きんこうなどの一部を除き、近代化の波の中で徐々に本来の姿を消していきました。

現在、「超絶技巧ちょうぜつぎこう」とも呼ばれるその製作技術は、残念ながら継承されていませんが、研究者や技術者たちは「難しい」と言われながらも、その技術の復元を目指しています。(並木 仁)

